

歴史的に証明されたチュチェ思想の生活力

ワジム・クジミン

サンクトペテルブルグ・金日成・金正日主義研究会

前世紀来、地球上には現代世界とその発展方式、未来観を立証しようとする思想、理論が氾濫している。これらの理論は、個々の国やグループに広がっている。ある国では、これらの理論は国家の思想として長年にわたって普及しているが、他の国では、短期間でも国家の思想になることなく生まれては消えていった。

もちろん、これらの理論の中には、時の試練に耐えられず、歴史の風にも耐えられず、奈落の底に落ちてしまった流行の流れに起因するものもある。そのような理論としては、「歴史の終わり」神話、ファシズム、ナショナリズム、あるいは例えば日本の反動的軍国主義でよく見られる「大東亜共栄圏」神話などが挙げられる。

現代のあらゆる理論と科学的な教えの中で、最も永続的で普遍的であり、時間をかけて検証されたものは、チュチェ思想だけである。

チュチェ思想の生命力とは何か、その全勝の科学性と歴史的意義とは何か。

この問いに答えるためには、チュチェ思想が人間を中心に置き、世界のあらゆる過程を経済観念の観点からではなく人民大衆の利益の観点から見た独創的な思想であることを思い起こす必要がある。

チュチェの思想は、朝鮮革命がその目的と実践にもとづいて展開される過程で形成された。

金正日同志は「チュチェの思想について」の中で次のように指摘している。

「革命は人民大衆が自主の要求を実現するための闘争であり、自己解放のための闘争である。革命に勝利するためには、革命思想で自らを武装させ、組織された政治勢力として結集することによってのみ、革命に勝利することができる。革命家の義務は、革命を遂行する人民大衆のなかに行き、彼らを教育し、組織し、闘争に引き上げることである。そして、革命的な力は、人民大衆の中で鍛えられなければならない。革命闘争の過程で生じるすべての問題は、人民の心と力を基礎にして解決されなければならない」

このように、金日成同志は、人物、より広くは人民大衆を中心に据えて朝鮮革命を開始し、最終的には日本帝国主義に対する輝かしい勝利を収めた。

アジアの主要な帝国主義勢力を打ち負かした後、朝鮮革命は、敗れたサムライに代わってKNRAを導入したアメリカ帝国主義という、さらに捕食的で陰湿な敵に直面したことを指摘しておきたいと思う。

朝鮮人民がこの不平等な闘争に耐え、勝利するためには、真に巨大な努力が必要であった。帝国主義軍は14カ国の支援を受けており、人員、装備、武器において圧倒的な優位性を持っていた。朝鮮人民の側にあったのは、道徳的な優位性と人民の強さと団結力だけであった。

全党、全軍、全人民大衆がチュチェ思想に基づいて団結し、一致団結し、全人民の総意の

代弁者である指導者に無条件に献身して、一つの政治的一枚岩を構成していたという事実がなければ、このようなことはできなかつたであろう。

このような不平等な対立の中で、驚くべき不屈の精神、勇気、自己犠牲の精神が発揮された例を、歴史は他に知ならない。思想の核がなければ、勝利することは不可能だっただろう。

朝鮮全土が廢墟と化した1950年から1953年の祖国解放戦争の勝利の後、朝鮮の人々は再建とさらなる発展という同様に巨大な課題に直面した。自分たちのためだけでなく全世界のためにも、これまでの犠牲が無駄ではなかつたこと、何千、何十万の革命家と人民の最高の代表がその貴重な命を無駄に捧げたのではなかつたことを証明しなければならなかつたのである

チュチェ思想は軍事面だけでなく平和構築の面でもその威力を発揮した。

当時、朝鮮には建物が一つも残っておらず、すべての工業企業が破壊され、インフラが野蛮に破壊されていた。アメリカの侵略者が飛行機を飛ばして朝鮮を爆撃したとき、彼らの野蛮な行為の標的は一つも見つからなかつたと言われている。それほど、朝鮮のすべては月面のような風景であり、生命のない、帝国主義の被害を受けた土地であつた。

しかし、このような悲惨な状況下でも、何千人もの忠実な息子を戦場で失つても、朝鮮の人々は復興に向けて熱心働いたのである。戦後、朝鮮人民が祖国を再建するために行った前例のない努力は、全人類の模範となるべきものである。1956年にはすでに、最初の勝利トラックが組み立てラインから誕生し、平壤をはじめとする都市は完全に再建され、農業では国全体で足りるだけの食料が生産された。

このような成果は、金日成同志が最初にチュチェの思想で築いた思想理論的基礎とさらなる発展のための明確な計画、そして戦場と平時の両方で試されたその科学的妥当性と実践なしには考えられなかつた。

朝鮮人民は千里馬に乗って、アジアの後進国であつた植民地国家を短期間のうちに、発達した現代科学と未来の展望を持った一流の産業大国にした。歴史の紆余曲折の中で、進歩的なチュチェ思想で武装した朝鮮人民は、最も困難で絶望的と思われる状況の中で勝利者となつたことが一度や二度ではない。

チュチェ思想で武装していれば、どんな困難も必ず克服できる。

栄光に満ちた朝鮮民主主義人民共和国の歴史をすべて語ることは、おそらく無理であろう。それは英雄的で比類のない物語である。小さな国が一つの家族のように暮らしていると、どんな状況でも常により強くなっていく。朝鮮の歴史の中で起こつたことの中で、朝鮮民主主義人民共和国が名誉を持って通過し、他のより大きくて豊かな国ができなかつたいくつかの例を挙げるだけで十分である.....

1994年、東欧諸国で資本主義が一時的に復活した。反動が激しく、帝国主義国が力をつけてきた。朝鮮はこれらの国の市場を一夜にして失つた。工場や製作所が閉鎖されていった。

7月8日、1945年以来、革命、党、国家の舵取りをしてきた金日成主席が予期せず退陣した。革命の世代交代という課題が、ここにきて予想外の緊急性をもって明らかになった。

これらの不穏な出来事は、3年連続で農作物が文字通り海に流されたり、山から降りてくる水

で破壊されたりした未曾有の自然災害、雨や台風によって、さらに悪化した。

この時点で、帝国主義勢力は、いわゆる「核の脅威」を主張して、朝鮮への圧力を繰り返し強めている。制裁措置がとられ、ただでさえ苦しい状況がさらに複雑になり、ただでさえ少ない資源を防衛のためはかなり使わなければならなくなった。

このような環境の中で、敵だけでなく、朝鮮に同情的な多くの人々が、「朝鮮の終わりは近い」「朝鮮は信じられないほどの困難のために崩壊する」「このような実験に耐えられる国は他にはない」と考えるようになりまし。ロシアでは、「朝鮮」というタイトルの本が出版された。ロシアは「朝鮮：日没する金正日の時代」という驚くべきタイトルの本を出版した。この本では、朝鮮のような非人間的な苦難に耐えられる国家は物理的に不可能であると主張している。

この本の著者がどうしているのか、生きていのかどうかは定かではない。しかし、誹謗キャンペーンの直後に朝鮮を訪れることができた人たちは、異口同音に、「確かに金日成・金正日の国には困難があるが、朝鮮の人々は楽観的で指導者を信じている。社会主義の建設現場がいたるところで沸き起こり、新しい工場が開設され、海から埋め立てられた新しい土地が耕されている。現在、資本主義が一時的に回復した国々に支配されているような落胆や倦怠感、絶望感はない。それどころか、一般的な熱意と沸き立つような活動がある。その結果、産業が爆発的に成長し、宇宙開発が進み、全国民の幸福度が徐々にではあるが着実に高まっていくであろう」と述べている。

チュチェ思想は現代のあらゆる課題に対応する助けとなる。

チュチェ109年(2020年)の冬の終わりに、世界各地で新型コロナウイルスの恐ろしい感染拡大が発生した。1919年の「スペイン風邪」以来、罪のない数億人の命を奪う可能性のある致命的な疾病の危険に人類が直面したのは初めてのことである。

各国でどのような対策がとられているかを見てみよう。あるところでは少しでも効果があり、またあるところでは効果がない。しかし、どこでも死はひろがる。どこでも経済は崩壊し、企業は倒産し、何千人もの労働者、農民、知識人が生活の手段を失うことになる。

しかし朝鮮だけは、真にチュチェ科学的な立場から、この危険な病との闘いを国家的課題として宣言するという接近をとった。国は完全に検疫に切り替え、その他の予防措置を講じた。例えば、朝鮮が自力でワクチンを製造したことが発表された。

金正恩同志は最近の演説で、自分と党と社会全体の最大の関心事は人民の健康を守ることであり、したがってチュチェ思想を指導理念とする国ではこの課題のために最大限の努力と資源を投入すると繰り返し強調した。

今日現在、朝鮮では伝染病が一件も発生しておらず、したがって死者も一人も出ていない。これは世界で最も高い、したがって最も成功した闘病方法である。それは完全に「チュチェの思想」に基づいており、今回も必然的に勝利の手立てとなるであろう。